

宇宙開発のまち肝付町で 住民に愛される地域医療を目指して

鹿児島県肝付町長

永野和行



2003年5月、内之浦宇宙空間観測所より、小惑星探査機を搭載したロケットが打ち上げられ、その7年後、長い旅を経て再び地球へ帰還した。その模様はテレビ中継され、世界中が注目する中、ミッションは成功した。小惑星探査機「はやぶさ」がもたらした喜びと感動は、広く知られるところである。さらには、「はやぶさ」が科学観測を行った小惑星イトカワには、「ミヤバル」や「ウチノウラ」といった地元になんだ地名が名付けられており、ロケット打上げの聖地として官民一体となった取り組みを行っているわが町にとって、非常にありがたいものである。

肝付町は平成17年7月に旧高山町と旧内之浦町の2町が合併し、人口約1万6,000人のまちとして、鹿児島県内でも珍しい町立の病院と准看護学校を併せ持つ自治体となった。肝付町立病院は病院本院と診療所から構成されており、主に旧内之浦町域の3,185人をカバーする病院である。

message

当院での診療科目は外科・内科・眼科・整形外科で、平成29年度においては1日平均89人の外来患者数となっており、病床は一般病棟40床、85.3%の病床利用率で推移している。地域唯一の救急告示病院で、24時間体制で患者を受け入れており、昨年は救急車受入れ約100件、時間外診察においては約500件であった。また、病院から15km離れた無医地区に開設された岸良診療所へ週2回の内科・外科の出張診療も行っており、昨年度は延べ1,496人の外来患者を診療した。平成27年4月からは鹿児島県地域枠医師を岸良診療所長として迎え、肝付町立病院と岸良診療所に欠かすことのできない医師として従事していただいている。



肝付町立病院は、設立当初から鹿児島大学から院長を迎え、常勤医師3名体制を基本として運営してきたが、平成16年度から始まった臨床研修制度の影響等もあり、平成25年を最後に常勤医師3名を確保することができていない。現在、井畔能文院長と県地域枠の医師1名が常勤で、近隣の医療機関や鹿児島大学からの非常勤医師の応援をいただきながら運営している。全国的に深刻化している医師不足はわが町でも例外ではなく、古今東西奔走しているが、未だ確保できておらず、喫緊の課題となっている。

しかしながら一方では、鹿児島大学からの医学生の受入れや研修医の受入れも積極的に行っており、医学生や地域枠医師からは、総合診療を学ぶには最適な場所だという有難い感想もいただいている。具体的には手術（下肢静脈瘤や腹腔鏡下胆嚢摘出術など）、外科的処置、整形外科的処置（関節注射など）、内科系（神経内科、循環器内科など）など、プライマリケアにおいて必要な技術など幅広く学ぶ場となっている。

入院患者については高齢化率も高いことから、急性期から慢性期、回復期まで多様な患者を可能な限り受

け入れている。地理的条件でへき地指定されていることに加え、社会的資源（老健施設や介護サービス事業所など）が少ないこともあり、一次救急においてできる限り治療を完結させ、ご自宅へ復帰していただけるよう努めている。その結果、在宅復帰率は9割前後を維持している状況である。

外来患者についてはリハビリ患者も多く、自家用車を持たない単身の高齢者なども多かった。このため、平成22年から無料送迎を行い、遠方に居住していても継続的なリハビリが可能となり、ストレスなく通院ができること好評をいただいている。



当該地区において、安心して暮らしていけるセーフティネットの役目をできるだけ強化する目的のもと、平成28年度において、新公立病院改革プランを策定し、5か年の具体的施策を設定した。具体的な方策の1つ目は、地域包括ケア病床への一部転換、2つ目は通所リハビリテーションの開設・運営、3つ目は各医療機関や介護・福祉との関係機関等の連携強化を掲げた。また、今後予想される急激な社会変化を迎えていく中で、多様化する在宅ニーズに応じた個別の対策も併せて行っていきたいと考えている。そのためにはやはり、医師確保は常勤医師3名体制が大前提となる。鹿児島大学はじめ、自治医科大学関係医師や各種医療機関への訪問など、地道な招致活動を継続的に行っている状況である。

今後の展望として、年々地区人口の減少傾向は続いているが、肝付町立病院は地域住民に必要とされる唯一の有床病院である。患者のご希望に沿うよう安心して住み慣れた地域で最後まで自分らしく生きていくための、地域包括ケアシステムの重要な一角を担う医療機関として、住民に愛され続けるよう今後も邁進していきたい。